

開催地名	兵庫県姫路市
開催日時	令和8年2月6日(金) 14:00 ~ 15:30
開催場所	姫路市防災センター
語り部	佐々木 守(岩手県釜石市)
参加者	姫路市役所職員 48名
開催経緯	近年、職員の危機管理意識が薄くなっている。いざ災害が起きた時に、各々が市の職員としてどのような行動を取ればよいのかを示す、市の防災計画はあり、その中で各局がどのように動くか記載はされているものの、日頃からこの計画に目を通しているわけではなく、このマニュアルに従って動くということを十分に理解できていないのが現状である。実際に東日本大震災で市の職員として活動された佐々木様の話を聴き、市民のためにどう動くのかを判断し、防災力の向上につながる学びの機会となしてほしい。
内容	<p>◇はじめに</p> <p>岩手県釜石市では、東日本大震災で約1000人の被害者を出してしまった。いうまでもなく我々、自治体職員の使命は、市民の生命を守るということに尽きるわけだが、財産も生命もたくさん失わせてしまった。私はその当時、自治体職員の防災担当者として非常に無力であった。</p> <p>(1) 岩手県釜石市について</p> <p>岩手県釜石市は沿岸部の中心に位置し、太平洋側なのでほとんど雪は降らない。釜石市は近代製鉄発祥の地である。江戸時代の後期に、初めて溶鉱炉を造り鉄鋼業で栄えた本市である。北九州の八幡製鉄所は、釜石市の技術者が現地に行って繁栄に携わった製鉄所であり、鉄のルーツは釜石市である。近代製鉄の世界遺産もあり、そしてラグビーの町といわれ、昭和53年頃から全日本選手権7連覇、新日鉄釜石ラグビー部が存在した。2019年には釜石市でラグビーワールドカップの試合が行われ、昭和39年には人口10万人と人が溢れる町であったが、東日本大震災前に4万人前後となり、震災後には2万7千人にまで減少している。</p> <p>(2) 私の取り組みと防災意識づくり</p> <p>私が防災課にいたのは、今から約17年前、宮城県沖地震が99%くると言われていた時代であった。当時、防災をひとつの柱にするつもりで活動していたが、やっていたと思いついていただけだった。震災に遭い、その当時に実施していたことは全く役に立たず、地域防災計画は無意味だったのである。書いてないことばかりが起こり、無力感しか感じられなかった。この経験を基に、研修や訓練を実施し防災に対してもっと真剣に取り組もうと自主防災組織を作った。</p>

住民には、自分の命は自分で守ること、自分たちで生きなければならないという意識付けをすることは必要であり、職員も市の財産を守れないことは仕方ないとしても、生命は守らなければならないということを再度、認識してもらう必要があった。

震災の7、8年前から某大学の教授が、防災指導を地域住民や高齢者に行っていたのだが、高齢者が口を揃えて釜石市には津波の心配がないと高をくくっていたのである。その理由として、震災の2年前、2009年に完成した水深63メートル、30年間で総工費1200億円もの湾口防波堤が完成したからである。これがあるから高齢者は安心しきっていたのだが、結局その防波堤でさえ津波で破壊されてしまった。そこで釜石市では、過去の経験に倣い悲劇を繰り返さないためにも、子供の防災教育に本腰を入れ教育を始めたのである。

当時の教育長が釜石市沿岸部の出身であったこともあり、子供の防災教育に全面的に賛同してくれ、先生の中でリーダーを作り、日本で初めて防災教育を小中学校の課題に取り入れたのである。防災教育を始めて以降、防災に対する子供たちの意識は随分と変わった。

子供たちの祖父母は何度か津波災害を経験しているが、今でも自分たちが暮らす町は被害に遭わないと危機感を感じていない。子供たちの親は災害を経験したことがない。その状況下で子供たちの意識から変えることで、ゆくゆくは親にも伝染し、みんなが防災意識を持つようになるだろうと考えた。

(3) あの日のこと

2011年3月11日の金曜日、私は当時、議会議場で翌年の予算を決めている最中であつた。14時46分ひどい揺れが発生し、議会はすぐに休会になった。かつて経験したことがないほどの揺れであつた。停電が起こったことにより入手情報が遮断され、視覚による情報を頼りにするしか他無かつた。車が津波に流され、木造の家屋を全部流し、鉄骨の家屋は鉄骨だけが残ってすべて流された。私は見ている事しかできなく、その時に上から見た光景は今でも忘れることができない。

実は3月11日の2日前にも津波注意報があつたのだが、みんな口を揃えて津波の心配は無いと安心しきっていた。防災行政無線で3メートルの津波と呼びかけをしてしまったため市民の反応はなく、さらにいうと釜石市には4メートル以上の湾口防波堤があるため、ほとんどの人が避難しなかつた。実際には、それ以上の脅威の高さで津波が人命を奪つた。それ以降マニュアルを一新し、あえて津波の高さを口外しないようにした。各自治体でも、防災行政無線の伝え方については検討すべきだと考える。命がかかる状況で生半可な優しい口調で

の呼びかけでは反応しない、多少強い口調でも逃げてもらえるなら強引さも必要なのではと思う。現在では、テレビでの避難呼びかけにも少しずつ変化が見えつつある。

・鵜住居小学校・釜石東中学校の出来事

この地区は、ハザードマップでは浸水しないはずの地域であった。しかし常日頃から、いざという時に備えて訓練は行っていた。実際に地震が発生し、小学生はすぐにでも避難しようと校舎の3階まで向かおうとした時に、中学生と消防団に引き留められ、一緒に逃げようと1.5キロ先まで避難した。結果的に、もしそのまま校舎の3階に残っていたら小学生は津波に飲み込まれていたのである。

後に、この行動は「釜石の奇跡」と世界中から称賛され、被災時にこの行動を取れたのは、常日頃からの防災教育の賜物であり、国でも子供の防災教育は必要だということを認めざるを得ない事案になった。この釜石モデルを参考に、現在も防災教育を進めているが、しかしながら「釜石の奇跡」の中には、実際に命を落とした児童と、学校関係者がいたことも事実である。学校を休んで家にいた児童2名、親が引き取った児童3名、そして学校の用務員が亡くなってしまった。そして自分たちは助かったけれど、親たちを亡くしてしまった児童も少なくはなかった。釜石市全体で約1,000人が亡くなってしまったが、彼らにとって「釜石の奇跡」という言葉は抵抗のある言葉であるがゆえに、現在では「釜石の出来事」と表現されている。

地震が原因による家屋の損壊は少なかったが、津波の被害で家屋が多く流され、800名もの人の命が奪われ現在でも152名が未だ行方不明である。ライフラインが断絶されたことにより、トイレ事情に苦労して重要性を痛感するとは思ってもいなかった。断水によりトイレの衛生環境は劣悪、そのためトイレに行きたくないという我慢する人も増え、それが原因で体調を悪くする人が多かった。避難所も同じ環境であろうが今一度、見直していく課題は山積みである。

・地域防災計画

地域防災計画は実際役には立たなかった。次々と想像していなかったことが発生し、その過去の悲惨な状況を踏まえ、様々な市町村の地域防災計画は以降、新しくなっている。しかし、一番大事なことは住民の避難をするという意識を徹底的に芽生えさせることである。避難所運営については、感染症のリスクや外国人による宗教上の食べ物問題、アレルギー問題、またペットがいる場合はどうするのか。様々な問題があるが、自分事にしてシミュレーションをすることが大事である。

